

## ASE を体験した参加者が得た気づき

### Awareness gained by participants who experienced ASE

○田渕洋勝（大阪体育大学大学院） 伊原久美子（大阪体育大学）  
高橋宏斗（大阪体育大学大学院） 久田竜平（大阪体育大学）

キーワード：ASE、気づき、テキストマイニング、ふきだし法

#### 1. はじめに

ASE (Action Socialization Experience : 社会性を育成する実際体験) とは、1人では解決できないような肉体的・精神的課題に対し、メンバー1人1人がそれぞれの能力を出し合い、協力しあいながらグループで課題を解決していくアクティビティである（改訂キヤンプテキスト、1989）。ASE の先行研究において、ASE が集団の雰囲気（井村ら、1999）、集団凝集性（伊原ら、2014）、メンタルヘルス（小田ら、2010）、他者受容感（加藤ら、2006）に肯定的な影響を与えることが明らかになっている。しかしこれらの研究は、既存の尺度や評価方法を用いていることが多く、ASE に適した尺度を扱っているとは言い切れない。そのため ASE がもたらす恩恵を計りきれない可能性があると考えられる。そこで本研究は、野外教育の成果を得る要素の一つである、参加者の気づきに焦点を当てることとした。星野（2001）は人が人あるいは自然物や社会とかかわり、何かを学ぶときに、その学びを最も強く促すものが、各人の気づきによってもたらされる何かであると述べている。

以上より本研究は、「ASE を体験した参加者が共通に得た気づきは何か」をリサーチクエスチョンとし、質的データから ASE から得られるものを明らかにすることとした。

#### 2. 研究方法

##### 2-1. 調査対象者

2017年2月28日に行われた ASE プログラムに参加した A 大学アメリカンフットボール部（2-4年生）の部員 54名（男性 49名、女

性 5名）を調査対象とした。

##### 2-2. プログラム概要

本研究の ASE は①集団凝集性の向上、②学年を超えた信頼関係の構築を目的とした日帰りのプログラムであった。オリエンテーションの後に、午前中はヘリウムフープやキーパンチ、ズームなどの難易度やリスクの低い活動を行った。午後からは、クモの巣、エレクトリックフェンス、ビームなどの難易度やリスクが高い活動を行い、最後に全体でふりかえりを実施した。指導は野外教育を専門とする大学教員がプログラムディレクターを担い、各班には、1名ないし 2名の野外教育を専攻する大学院生および大学生のカウンセラーが配置された。ASE の課題配列や課題後のふりかえり活動は班の状況に合わせ、実施された。

##### 2-3. 調査方法

調査は、午前の ASE 後と午後の ASE 後の 2 回にわたり実施した。質問紙は松本（2015）のふきだし法の手法を参考に作成したふきだし式ふりかえりシートを使用し、「ASE をふりかえって、気付いたことや感じたこと」について ASE 参加者に自由記述を求めた。

##### 2-4. 分析方法

本研究の分析には、テキストを定量的に分析していくことから、Text Mining Studio 5.2（株式会社 NTT データ数理システム社製）を用いた。分析は金（2009）の統計的テキスト解析の手順を参考に実施した。そして、どのような単語が上位に抽出されているかを確認するために単語頻度解析を行い、その後、

共起関係における、ことば間の関係をことばネットワーク分析によりクラスターを抽出した。

### 3. 結果

最初に、参加者から得られた ASE の主観的恩恵に関するふきだしへの回答は 427 件であり、対象者一人あたり平均 7.91 個の回答が得られた。これらの回答に対して、先ず、単語頻度解析を実施した。本研究では上位 10 件に抽出されたキーワードを表 1 に示した。

表 1 単語頻度解析の結果（上位 10 件）

単語	頻度
意見	51
みんな	39
集中力	31
最後	22
楽しい	19
難しい	18
できる	16
アイディア	15
人	15
いう	14

続いて、出現頻度が 3 回以上の単語に対して、共起関係におけることばネットワーク分析を行った。その結果、10 個のクラスターが抽出された（図 1）。

### 4. 考察

単語頻度解析において、キーワードを抽出

した結果、「意見」や「いう」などコミュニケーションに関わる気づき、「みんな」や「人」など、他者への意識や一体感に関わる気づきが特に多く挙げられた。また、ことばネットワーク分析においても、「意見」や「コミュニケーション」、「みんな」の上記の気づきと類似したクラスターが出現した。この要因として ASE は話し合ったり、協働したりしなければ解決できないため、その特性がこれらの気づきを与えたと考えられる。また、これらの気づきは、集団や他者へ焦点を当てたものであり、ASE の先行研究を支持したと考えられる。

他方、「信頼」、「高い」のクラスターにおいては、それぞれの原文を参照すると、「ビームは高くて怖かった」や「仲間に体を預けたりする信頼感」などの記述があった。これより、ASE は身体性が強く、さらにリスクを伴う活動であったことが伺える。これらの価値観は、多様化するチームビルディングの中で ASE の独自性を見出す要素として期待できると考えられる。

しかしながら、本研究は、1 事例の ASE のみ扱っていることから、抽出された結果は限定的であるといえる。今後は、様々な対象者や目的の ASE を対象としながら、包括的に ASE 参加者の主観的恩恵を探る必要があると考えられる。

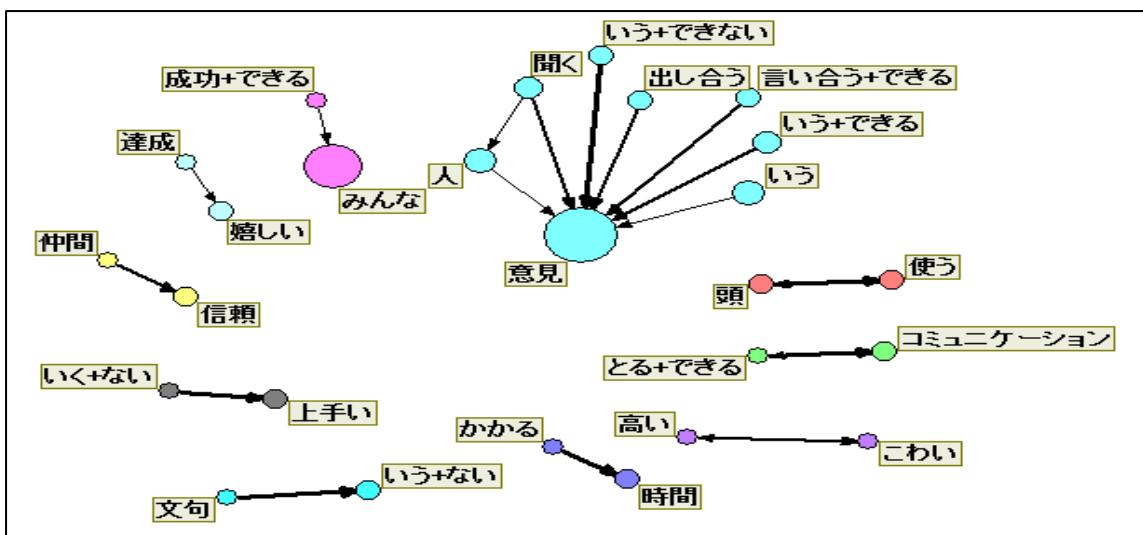


図 1 ことばネットワーク分析の結果